

花火と売上の面白い相関

2026. 8. 31
営業技術部 藤本

先日3歳になる孫に初花火を見せようと芦田川の花火大会に行ってきました。
長いこと行ってなかったので規模の大きさと絶え間ない打ち上げに感動しました。
以前は協賛会社毎にテーマがあり、打ち上げ間隔が空いていたように思いましたが、
先日は、ほぼ切れ目のない状態で30分強で終了しました。
毎年いろいろ工夫して福山市の夏を盛り上げようとしている様がよくわかりました。



ところで、福山の花火大会はどのように変化してきたのでしょうか
興味がわきましたのでジェミニ（AI）に10年刻みで聞いてみました。
そこに福山市の人口、柿原工業の売上を入れてみましたのでご覧ください。
福山の人口とともに花火玉数も増え、売上も増えています。

ここまでは人口増加の勢いに乗って（？）好調にきましたが、これからは
1段ロケットを切外し2段ロケットの力でさらに高く飛躍したいですね。
そう2段めのロケットはLumiKA+です。

花火大会は今まで市民のニーズに対応し変化してきました、今後も最適化を模索していくでしょう。
当社も市場ニーズをしっかりとらえ、コア事業を安定化させ、LumiKA+で新展開へ！
（以下AI抜粋）

過去60年のデータを10年ごとのデータで整理すると、「都市の急成長期」から「成熟・質的転換期」へ
の変化がより鮮明に見えてきます。
特に大きな転換点は、2010年代（花火の規模が最大化）と2020年代（人口減少と運営の適正化）です。

福山花火大会と人口・観客数の過去60年推移表

年次	西暦	花火玉数 (打ち上げ数)	観客数 (人出)	福山市の人口 (当時の行政区域)	時代背景・備考	柿原工業 売上金額
60年前	1966	数百～数千発 (草戸の花火)	数万人 (地域祭礼)	213,090人 (合併直後)	現・福山市誕生の年 旧福山・松永の対等合併。まだ地域的な祭りの色彩が強い時代。	第5期 データなし
50年前	1976	約3,000発 (草戸の花火)	約10万人	325,574人 (75年値)	人口爆発期 製鉄所の本格稼働と周辺町村の合併により、10年で人口が10万人以上急増。	第15期 データなし
40年前	1986	約5,000発 (あしだ川初期)	約20万人	360,261人 (85年値)	あしだ川花火の定着 1984年に主催者記録が開始。都市規模拡大に伴いイベントも大型化へ。	第25期 34億
30年前	1996	約10,000発	約30万人 (公称値)	374,517人 (95年値)	1万発の大台へ 平成の安定成長期。この頃から「30万人」という数字が定着し始める。	第35期 33億
20年前	2006	約13,000発	約32万人 (公称値)	462,885人 (神辺合併後)	平成の大合併完了 新市・沼隈・神辺等の合併により、人口・市域ともに現在の規模が完成。	第45期 49億
10年前	2016	約16,000発 (最大規模)	約35万人 (公称値)	464,811人 (15年値)	人口・規模のピーク 市政施行100周年記念などを受け、花火の規模が西日本最大級へ到達。	第55期 50億
現在	2026	約16,000発 (質的維持)	約11.1万人 (実測値)	444,047人 (推計)	実態への適正化 人口は減少局面へ。観客数はデジタル計測等により「実態値」へ修正される。	第65期 33億

年代ごとのポイント解説

1. 1966年～1976年（高度成長と都市形成）

福山市の人口が21万人から32万人へ激増した時期です。これに伴い、花火大会も神社の奉納花火（草戸稲荷など）から、市民全体を楽しむ「観光イベント」としての性質を帯び始めました。

2. 1986年～2006年（拡大と合併）

1984年に現在の運営母体による記録が開始され、「あしだ川花火大会」としてのブランドが確立しました。2000年代の「平成の大合併」で市域が大きく広がり、人口が46万人を超えたことで、イベントの動員力も最大化しました。

3. 2016年～2026年（成熟と再定義）

2016年頃に人口・花火の規模ともにピークを迎えました。現在は人口減少社会に対応し、「数は減っても、満足度と安全性を高める」方向へシフトしています。2026年の観客数（約11万人）は、激減したのではなく「有料席の導入やAI・デジタル技術による正確なカウント」によって、よりリアルな数字が可視化された結果と言えます。